
クレイジードール

Tetsuya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイジードール

【Nコード】

N8763Z

【作者名】

Tetsuya

【あらすじ】

山と海しかない田舎町に未来君はいた。

僕は偶然にも未来君の書く小説に登場してしまい長閑な中学校生活が急変していく。

現実を書く未来君ははたして神なのかそれとも……

現実と空想の交わる時、その少年は未来を変える。

と格好付けてみたんですけど内容は馬鹿っぽいです。ぜひ読んでく

ださい。

プロローグ(前書き)

主人公は都です。

プロローグ

プロローグ

「面倒だ」

やっちゃったな、教室に忘れ物するなんて

明日提出の数学のプリントを教室に忘れた僕は早足で教室に向かっていた。図書室で今日の宿題を済ましてから帰宅しようと思っていたんだけど。一番面倒な数学のプリントを最後に回していたから、無い事に気が付いたのはすっかり日が傾き始めたころだった。え、部活？そんなだるい事やってらんないって、僕は何にも縛られずに生きていくのさ。せめて学生でいる間だけでもね。

人気の失せた校舎を一人、てくてくと歩いているとグラウンドから部活動をしている連中の掛け声が聞こえてくる、全くもって何が楽しいのやら。

教室に着くと中から誰かまだ残っているのかシャープペンシルの音が聞こえてくる、教室に入ると僕の隣の席の日向未来君（コイツも帰宅部）がいて、原稿用紙と睨めっこしていた。

へえまだやってるんだ。

「ねえ未来君、なに書いてんの？」

中学二年生になり早一ヶ月が過ぎて、ようやくクラスの雰囲気が出来上がってきた今日この頃、いきなり隣の席の未来君が朝からいきなり原稿用紙にペンを走らせ続けていた。それは帰りのHRになっても止めず、僕が忘れ物を取りに教室に来た今現在まで続けた。

未来君は学年が上がってからのこの一ヶ月間ずっと誰とも関わらず、一人で読書ばかりしていて根暗なイメージが強かったんだけど、今日の未来君はこの一ヶ月間の時間を取り戻すかのように、執筆していた。そんな事より友達作れよと僕は思う。といっても僕もあま

りこのクラスでつるむ奴なんていないけど。

それを見た僕は興味本位で初めて未来君に声をかけた。その時の教室には忘れ物を取りに来た僕と原稿用紙に何かしら書き込んでいる未来君だけじゃなく、一人で自習している女子生徒と一人で本を読んでいる女子生徒を合わせて四人いた。思えばこの四人がこの時、この場にいたのは既に未来君のあらずじだったのかもしれない。

「これは、俺の夢だ」

突然声をかけた僕の方を向くこともせず未来君は抽象的な事を言った。窓から差し込む夕日のせいでの時の未来君の顔は見えなかったけど、きつと自信に満ち溢れた表情だったんだろうとその声だけで容易に想像できた。憎々しいことに

「夢？」

ようやく逆光に目が慣れてきて、ゆっくりとこつちを向いた未来君の顔が見える。想像していた通りの自信満々の笑顔で彼は言った。

「ああ、俺は……………文士になるんだ」

後に僕は、未来君の夢に毎日付き合う事になるんだけど、この時はまだ知る由も無かった。一番悪いのはこの時に未来君を止めようとしなかった僕なのか、そんな運命を押し付けた神様なのかは分からないけど、やっぱりそれを書き続ける未来君を恨まずにはいられない。だけどそれも仕方ない事なのだろう。

そっだよな？ユウキ。

プロローグ（後書き）

自分の未熟さを見てもらう時が来ました。
辛口意見をお待ちしております。

ノウシスターノウブラザー 1 (前書き)

景人は主人公じゃありません

ノウシスターノウブラザー 1

夢を見ていた、そんな気がする。目を開けたら朝だった。窓からは光が差ししていて、外からは小鳥がチュンチュンと囀る小さな演奏会が聞こえる、また僕のいつもと変わらない一日が始まった。

僕の部屋には、デスクトップパソコンと小さな本棚（本は入っていない）があるだけのベットも机も無い殺風景な部屋だ。確認のため左手を見ると何本もの線が走っている。世間では自傷行為と呼ばれているらしい、最近ニユースでよくやってる、結構流行ってるそうだ。理由なんて人それぞれで、大概の場合がイジメとか薬物中毒者とかがやるみたいだけど、僕の理由はその例に当てはまらず、突然の罪悪感と衝動に突き動かされるまま自分の身体を刻み付けていて、それでもこの世からオサラバする勇気も無く、しぶとく生き続けているのである。

情けない事に。

「今日は……何しようかな……」

確か昨日はオンラインRPGを一日中していた。何も無い部屋だけど、インターネットが繋がっている現状に感謝する。それで今日もゲームすればいいじゃないかと自分に問うと、キーボードの上の赤い絨毯を見る。

昨日の僕は何を思ったのか、ゲームの最中にいきなり死にたくなつて本棚からバタフライナイフを取り出して自分の左手に傷をつけた。血が傷口から流れ出るのを見て落ち着いた僕はしばらく自己嫌悪になり、適当に止血して寝た。その際流れ出た血がキーボードとコントローラーパッドに大量に付着していて、壊れてないとしても気持ち悪くて触る気にはなれない。なんてことは無い、ただの自業自得だ。

そんな自虐思考はコンコンと小気味のいいノックの音が部屋に響き中断される、母さんが朝食を持ってきたのだろう。毎日頼んでも

無いのに、律儀なものだ。僕が引きこもってから母さんと一度も顔をあわせていないし、会話もしていない、何も言っていないのだ。僕は足音が離れていくのを確認して小さくドアを開ける、顔をあわせないように、そして朝食ののったトレイを取りドアを閉める。いい具合に空いた腹を満たそうと箸を取った、すると遠くから聞き慣れたチャイムが聞こえてきた。

キーンコーンカーンコーン

そのチャイムは以前僕が通っていた高校から聞こえてきた。今では引きこもりの僕だけど、二ヶ月前のあの日まではちよつと引ッ込み思案で個性の強い高校生だった。周りからはよく変わってるって茶化されたな。だけどそんな僕はある日を境に生きていく事に絶望してしまった。

そう僕は二ヶ月前にクラスのアイドルで可愛くてキュートで僕の密かな初恋相手の相沢菜子あいさわ なこさんに一世……いや十世一代（十回の生まれ変わりの内、一回だけ）くらいの覚悟と勢いをもってラブレターを書いたのだ。（その日、朝のニュースの運勢ランキング1位だった）そして手紙に書いた場所に約束した時間の三十分前に行き、ドキドキしながら脳内で何回も告白するシミュレーションを繰り返し、よしっ！バツチ来い！とまで気合を込めた。

それなのに約束の時間に僕の目の前に現れたのは何故か相沢さんではなく親が仲がいいとかで幼馴染みであり年上の鳳遙おおとじ はるかだった。

「っ何でだよ!？」

と突ッ込んでから、彼女の左手にある見覚えの無い桃色の便箋が握られていることに気付いた。もしか、誰か違う奴と告白の時間と場所が重なったのか？確かに客観的な目で見ると遙は美人だ……いや待て、だったら遙の相手が来ているはずだ！相手を呼び出しておいて遅れてくる奴などいないはず、そうだ落ち着け、冷静になれ僕！

「ねえ景人、この手紙を書いたのって……」
「知らん！」

即答した。すると緊張していたのであろう遙はふうと小さくため息をついた。そんな仕草もサマになっている。一つ年上とは思えないほど大人びていて美人だ。外見に関しては、そう外見だけは！「だよねえ、景人にそんな度胸があるわけ無いもんね、やっぱりただの悪戯かあ、それで何で景人がここにいるの？」

うぐっ！

い、言えない、ラブレターを書いたけどすっぱかされたなんて、なんかもう情けなくて言えない。

「ちよつと、一人になりたかったただだよ、それに遙の方こそ何でここにいるんだよ」

遙は顔を若干しかめながら左手の便箋を見せつけた。便箋には筆書きで恋文となかなか男らしい字で書かれていた。何時の時代だよ。「どっかの馬鹿があたし相手に悪戯の手紙を書いてきてさあ、ぶちのめしてやろうと意気込んできたんだけど」

……………ぶちのめす？

「遙、その手紙の内容ってどんな感じ？」

脳が聞くな！聞くんじゃねえ！！とアラートをガンガン鳴らしているが好奇心が勝り、つい聞いてしまった。遙は少々男勝りな性格で気に入らないことには暴力で解決しようとする悪癖があるのだ。しかも凄く強い。好奇心は猫を殺すって奴。うかつなことを言う痛い目を見るのだ。

後悔？そんなもの、後でするさ！

「この手紙の内容？ええと」

『拝啓 鳳遙殿、突然このような手紙を送りつけた非礼を許してもらいたい。この度某は貴殿それがしの美しさに筆をとった所存である』

って文から始まって七枚ほど筆書きで書かれてるの」

「どこのどいつだよ！？そんなふざけた手紙書いた奴！僕がぶん殴

「つてやる！」

「いやいや殿つて女子相手にそりやねえだろとか言い回しが古臭いとか某とか名乗ってんじゃねえとかなんで桃色の便箋を使ったんだよ！とか突っ込み所満載だった。決して知り合いでは無いことを祈る。」

「ええ、あまりにふざけてるからこの馬鹿野郎かと気になって、思わず来ちゃったんだけど、そしたら景人が居るからビックリした」
「僕だつて相沢さんが来ると思っていたのに遥が来てビックリだよ。どんな詐欺だよ、僕の勇気を返せ！」

「ところでさつきから景人がその右手に握り締めてる青い便箋は何？」

「僕が一人で世の中の不条理を憎んでいると遥が僕の右手を指差す。その指先には……ガツチリ握り締められた相沢さん宛てのラブレターがあつた。」

「ホワイ！？」

「何で？なんで？ナンデ？僕のバカア！な・ん・で僕が持つてんだよ！そりや来るはず無いよ！一体僕はこの三十分間誰を待つてたんだよ！」

「誰が来るはず無いの？」

「聞・か・れ・て・たあ！どうするんだ僕！考えろ、落ち着け、大丈夫だ。この女は昔から鈍感だ。今から僕の巧みなトークで挽回してやるぜ。」

「……景人つてさあ昔から自分の考えが口からだだ漏れだよね」

「しまったああああああ。ああ遥の視線が痛い痛い痛い！」

「えっと、それつてもしかしてラブレター？」

「ななななんて分かるんだよ。」

「ち、違うよ！これは……」

「これは？」

「遥が疑惑の目でじいいつと効果音がつくくらい僕を見た。おいなんなんだよこの状況？ええい！！ままよ！もうどうにでもなれ！」

「は、果たし状だ！」

遙の顔が一転して「ええええええ？」と若干引いたように後ずさる。

しまった、適當過ぎた！

「へえそうなの、だったらあたしは邪魔だよ、じゃさよなら」

あからさまに僕を蔑む目で見て、そそくさとその場から遙は僕から離れていく、一度だけ振り返り敬語で

「気持ち悪いから、今後話しかけてこないでください」
拒絶された。

「嘘です！冗談です！ごめんなさい！」

何故か平身低頭で謝っている僕だった。

朝のニュースキャスターのおねーさん、今日の僕のラッキーアイテムってなんでしたっけ？今、用意できるものだといいな。

雲の無い青空を見上げて僕は現実逃避した。

ノウシスターノウブラザー 1 (後書き)

思いつきで書きなぐった第一話です。

少しですが、なるべく間を空けずに投稿していきます！

ノウシスターノウブラザー 2

「てな感じなんだけど、どう？面白いつしょ？」

「う〜〜んううう……………」

連休明けの教室で僕を待ち受けていたのは自作のライトノベルを自信満々に音読してくるクラスメイトの日向未来君^{ひゅうが みらい}だった。今日は早く来て寝る予定だったのに、いい迷惑だ。

「よくそんな自信満々で面白いつて言えるね、いきなり主人公がリストカットしてるじゃん」

「読者の目を釘付けだぜ！」

凄くいい笑顔の未来君だった。キラリと光る前歯が眩しい。彼は僕がこのクラスで唯一まともに話す相手なんだけど、別に仲が良い訳ではなく僕を友達だと思っていない。そういう訳で僕にも彼にも友達はいない、クラスでは浮いているほうだ。

ま、だからどうしたって事でもないけどね。

「僕はそこで興味が失せたけどね」

未来君のまぶしいぐらいの笑顔に対して、僕も出来る限りの笑顔で返した。

もちろん皮肉だ。

「都はクレームが多いな」

未来君は僕の目の前でフーヤレヤレとこれ見よがしに溜息をはいた。

地味にウゼエ。

「つけたくなる様な内容なんだもん、それに鳳^{ほう}って鳩子^{こう}ちゃんと同じ名字使ってるけど、なんで？」

僕が端っこの席でいつでも本を読んでいる鳳鳩子^{ほうこう}ちゃんを指差しながらそう聞いた。

それに対して未来君はふん、それはだなあ。と何故か得意そうに

説明する。

「鳳なんて珍しい名字、いかにも仮想世界にピッタリじゃないか、それに遥で漢字二文字！どうよ！なかなか味のある名前だろう？」

あつそう、あまりの下らなさに思わず口にする所だった。危ない危ない、未来君は休日の度に自作のライトノベルを書いてわざわざ僕に読ませたり、話して聞かせたりするんだけど一度だけ聞き流しながら、あつそう、と言っちゃった時、烈火のごとく怒り出し、宥めるのが大変だった。なのでしつかり考えて返答する。それに今ではどんな話でも聞き逃す事は出来ないし。

「確かに空想の人物って感じがするけど、それじゃ現実味が薄れてファンタジックになるんじゃない？」

冷静に指摘すると未来君はそこで考えを変えたのか、なるほど、確かにとしきりに頷く。未来君って自分勝手な所が目立つけど、しつかり人の意見を素直に聞くから僕も趣味に付き合ってもらえるんだよね。本を読むのは好きだし。

「それは都の言うとおりだな、だったら今度は楠木都くすのぎ みちって名前を使うよ。」

なんで僕の名前なんだよ。

しかもフルネーム

「未来君、あんまり身近の人の名前を使っていると、その使われている人は嫌な気分になるよ。っていうか昔一回使ったよね？」

覚えてないだろうけど。

「え？使った覚えは無いけど……嫌なのか？」

「そりゃ嫌だよ！」

全くこのボンクラは何を考えているのだろうか……

「なんだよりアリティにしろって言ったくせに」

どんな納得の仕方だよ、ていうかなんで不貞腐れるのかなあ、振り回されてるの僕なのに。

とむくれていると、朝のHRの時間になり、教室の扉が開いた。

どうやらずいぶん話し込んでいたようだ、ああ僕の貴重な睡眠時

間があ（泣）

ガラガラ

「おらー席につけーって皆座ってるか、ふん、感心、感心」

僕と未来君が不貞腐れると同時に担任の佐倉さくら旋衛せんえ先生が入ってきた。佐倉先生は数学教師で今年で三十歳の若い先生なんだけど、身体がどう見ても体育教師としか思えないくらい物凄くマッチョメンだ。何故体育教師ではないのだろう？（この学校に七不思議があれば採用されるだろうに）その見た目どおり言葉遣いは荒いけど、そんな外見に反してとても優しく、生徒に甘い先生で怒った所は一度も見ていない。

もちろん生徒からは人気がある。

「よし、欠席はいねえな、ん？赤碕が来てない？珍しい事もあるもんだな、まあいつか、それよりお前らあ、朗報だ。今日この二ーBに転校生がやって来たぞ」

え？梅雨になったばかりのこの時期に転校生？親の転勤かなんかな？無い事もないだろうけど、こんな田舎に来るなんてよっぽど珍しい事だな。いや、田舎だからこそ転勤させられるのかな？うん……わかんないや。

ガタツ

「せんせー、男の娘ですか？女の子ですか？」

勢いよく立ち上がってここぞとばかりに質問したのはクラスで普段は目立たない男子、鈴樹すずき君だった。というか男の娘って何？何故か寒気がするんだけど。

「喜べ、女の子だ」

男の娘はスルーされたようだ。一般的にその質問は普通なのかな？

「なんだ、女の子か……」

それと何故か鈴樹君のテンションが下がった。いや彼がガツカリした理由が分からない。それになんでチラツと僕を見たの？

「お、来たみたいだな、よし入れ、……ん？何で赤碕までいるんだ？」
教室に入ってきたのは見知らぬ女子、つまり転校生ともう一人このクラスの一番の秀才、赤碕静あかさき しずかさんだった。

「登校してくる途中で迷子になってるコイツの面倒みながら来たんです」

赤碕さんは後ろで申し訳なさそうにしきりに謝る転校生を一瞥した。

あれ？先生が廊下で待たせていたんじゃないの？

不審に思い佐倉先生を見ると……

「時間になつても来ないから何の演出かと思つていたんだが……迷子だったのか」

おいおいおいこの不良教師！！なんで約束の時間に転校生が来ないのを演出だと考えるんだよ！！

「……まあそう思うよねえ」「……」

いやいやいやいやなんでクラスの皆さんは納得してるの！？下手したらつていうか赤碕さんがいなかったら今教室で転校生と会えたかどうか分かんないよ！！

「はい、これが家の敷地内に居たので仕方なく案内してきましたんです」
駄目だ、完全に流されてる。

……ま、別にいいかな、僕に関係のあることでもないし。

「ごめんなさい、赤碕さん」

その転校生は下げた頭も上げずに赤碕さんに謝っている。

災難だな転校生、赤碕さんは他人にも自分にも厳しい人で言葉がきついし一緒にいると何かと疲れる、でも自分が遅刻してまでも人の面倒をみる、優しい人だったりもするんだけど。

「そうか、なら赤碕は遅刻にはしないでおくよ、他の先生には内緒だぞ」

甘いな先生。ばれたら退職させられるんじゃないかな？

「別にそんな事する必用はありません」

強情だな赤碕さん。相変わらずの優等生だ。

「あの、自己紹介……してもいいですか？」

すっかり蚊帳の外だな転校生。……あらためてよく見ると結構可愛いな、目はパッチリしててショートヘアも似合っていて元気なスポーツ少女って感じがして。

「ああ、スマン、とりあえず赤碕は席に座れ、改めて今日から二一Bに転校した日向未来さんだ」

そう言いながら先生は黒板に名前を書く。

「親の事情でこちらに引越してきた日向未来です、よろしく」

ざわざわっつっ！！（クラス中がこっちを向く音）

クラスが一齐に僕の隣の席、未来君の席を見た。……えーと？ひなたみく？……未来君と同姓同名！？……読み方違うけど。

「いやあ先生もビックリだ、まさか日向と同じ漢字の名前の奴がこのクラスになるなんて」

僕は隣の席の未来君を見ると何故かニヒルに笑っていた。

「ネタだな、三流の、俺だったらもつと面白く出来る」

彼は何故現実と張り合っているのだろうか？確かに面白くないけど。どつちも

「席はそうだな、楠木から一つずつ後ろに下がれ」

……佐倉先生……もしかして、その転校生の席を未来君の隣にす

るの？

「で日向ひなたは空いた席に座れ」

うん、やっぱりか。なんて漫画チックなんだろう、まるで面白くはないけど。

「ふう、四流のネタだな」

だから何と張り合ってるの未来君？

「よろしくね、日向ひなた君」

気がつくと転校生は席に着き未来君に挨拶していた、それに対して未来君もよろしくと返した。元気で陽気な印象のその転校生とのファーストコンタクトはすごくグダグダだった。そのせいでこの時の僕はまだ気付けずにいた。一つの違和感に。

ノウシスターノウブラザー 2 (後書き)

こちらがこの話の現実です。

一つずつ交互に投稿していきます。

使われる)人目を気にせずにいじける事が出来た。

「なんだってこんなミスをしちまったんだ僕は」

真剣に頭を抱える僕にまだニヤケ顔の遙がボソツと言う。

「ま、景人らしいっちゃんらしいけど……」

何だそりゃ、いったいコヤツは僕にどんなイメージを持ってるんだ？

「僕らしいって何だよ!？」

その問いに遙は余裕の表情で答える。

「レタスと白菜を間違えるのが貴方らしさよ」

「間違ツツ……た…事もあるけど、それ五歳の時だろうが!！」

なんて昔の事を掘り返してくるんだ!恐るべし幼馴染!!

そんなツツコミに対してさらに昔を思い出すような表情になって
「懐かしいな…農場見学の時に一人『あれがレタスだよ』って自信
満々で言っただけ農家の人に白菜だって言われた時の景人の顔……」

!!!!!!!!!!!!!!

「やめてえ!それ以上言わないで!！」

誰にも聞かれてないのに恥ずかしい!超恥ずかしい!!!!!!!

「そんなアホらしさが、景人!貴方なのよ!！」

少し芝居がかった言い方をする遙を見て、少し頭が覚めた。

ああ、またからかわれたよ……。

「どーせ僕はアホな子ですよーだ」

諦めて開き直った僕に遙は、頭をポンポンと叩き優しく笑いながら

「やっと自覚できたんだね、お姉さん感激」
追い討ちをかけてきやがった。

「てめえ！いい加減にしやがれ！」

凹んでいるのに追い討ちしてきた遙の頭に置かれていている手を強く掴んで立ち上がった。そしてそのまま自分のほうに引き寄せる。

「え？ちよ…まって…」

ふん、ざまあみ……あれ？遙ってこんなにでかかったっけ、……
しまった、こいつ、僕より背が高い、つまり

「ちよ…おま……倒れてくんなあ！」

引き寄せたまま支えきれずに僕のほうに倒れてきた。

「引っ張ってんのそっちでしょー！」

どつて〜ん

とりあえず僕は遙を地面にぶつけないよう自分が下敷きに（元々下だけど）なるように倒れた。

うう〜めっちや背中痛いようう。

「痛ったあ〜…」

ん、何か顔に温かい空気が当たる、転んだ拍子できつく目を瞑っていた僕はゆっくりと目を開けた。

「……………」

一寸先の遙と目がバッチり合いました。遙は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

……………ええとなんだっけ？こついう時はどうするんだっけ？……………確

かアメリカのドラマとかだと熱いキツ……

「っじゃなくて！近い！近いよ遙！さっさと起きて！？」

慌てて起き上がるうとするけど遙が邪魔で起き上がれない。と、その時破滅の声エンジェルボイスが聞こえた。

「こ、こんな所で！？なんて大胆なの？」

……ちよつと待てえ、なんでだ！？なんで彼女がここに？なんだって相沢さんがこんなタイミングで現れるんだよお！！神様あ！居るならでてきやがれえ！！鼻っ面へし折ってやるう！

「こ、誤解だ相川さん！これは事故なんだあ！」

僕の魂の叫びがどう伝わったのか分からないけど相川さんは何かを悟ったように一人でぶつぶつと呟きながら

「そつよね、若いつてこつういふ事もあるんだよね」

と、しきりに納得していた。というか自己暗示していた。そんな慌てる姿も可愛いぜちきしよう！そしてようやく遙の下から這い出た僕はパニックをおこしている相沢さんに突っ込みをいれる。

「相沢さん、落ち着いて聞いてね、これは不慮の事故なんだよ！！僕は潔癖さ、なんだつてこんなDS女に興味なんて……」

僕はやつと立ち上がった遙を指差して身の潔白を訴えようとして数秒後、自分の失言に気付いた。

振り返ると……般若が立っていました。

あ……死んだこれ

「景人の……景人の……ツツバカアアア！！！！」

ツパアアアアン

鋭いピンタがとんで来ました。

……あれ？目の前が真っ白に……

夢を見ていた、そんな気がする。目を開けたら朝だった。窓からは光が差していて、外では小鳥がチュンチュンと小さな演奏会が聞こえる、自分の部屋なのだが何故かベッドではなく机に座っていて目の前に『相沢さんへ』と書かれた新品の青い便箋と真っ白な手紙がある。部屋にはコミック等が詰まった本棚と衣装ケースやノートパソコンがある、いつもどおりの自分の部屋だった。

左手に違和感を感じて、見てみるとみると蚊に刺された痕があるだけだった。

ボリボリボリ（左手を掻く音）

えっと、つまり

ノウシスターノウブラザー 3 (後書き)

短くてすみません。

この二人の会話がいっつかなくて…

ノウシスターノウブラザー 4 (前書き)

は作者の言葉です

ノウシスターノウブラザー 4

「夢かよっつー!!」

あれだけ意味深な書き出しから始まって全部夢かよ！納得いかない!!!

僕は昼休みのクラスで未来君の書いたライトノベルの続きを読んでいた。……だけどあんまりな展開に僕は大声で突っ込んでしまった。

周りの目も気にせずに。

「楠木、うるさい」

そしたら自習をしていた赤碕さんに睨まれてしまった。

納得いかないけど赤碕さんは悪くないので、とりあえず謝る。

「ごめんなさい」

すると赤碕さんは何も言わずにまた自習に戻る。

どうでもいいけど赤碕さんって休み時間は勉強しているところしか見えないな、なんて思考をそらすと

「いくら面白いからってそんなに興奮するなよ」

満足そうな笑顔でふざけた事を言う未来君の言葉でこっちに帰る。なんてムカつく解釈の仕方なんだろう、ぶん殴っていいかな？

グーで

「なあんだ、夢だったんだ、なんか残念」

未来君を殴ろうと腰を浮かせた僕は横から声がして、そっちを向くと転校生の日向さんが未来君のライトノベルと呼ぶにはお粗末なものを読んでいた。あれを強要されずに読めるなんてずいぶん神経が太い人だな。

「とういかなんで日向さんも読んでるの？」

未来君の席の隣で『え？今さら？』とでも言いたげな表情で僕を

見る。いや、だってね、未来君のライトノベルを読むのって体力と集中力使うんだよ、主に突っ込みで。

「隣の席と後ろの席の人が朝から自作の小説の話ばかりするから、気になって日向君ひゅうがに読ましてもらったの。そしたら中々面白くてね」
何……だって。

面白い？

これが！？

「ふん、これが一般的な意見という事だなクスノキ君」

斜めの席でたった一人の支持を受けただけの未来君がふんぞり返って言う。

確かに世の中にはいろんな感性を持つ人がいる、でも未来君の書いた小説を面白いと思う人なんて万人に一人くらいのもだろう、そしてそれがたまたま日向さんだったというだけの事だろう。

「……いや自己嫌悪はやめておこう。これが……若さ故

「……どうせ万人受けしないさ……」

「なんでそんな事言うの？みゃー君」

僕の苦し紛れの嫌味を否定する声がある。それは予想外の人物だった。

「鳩子ちゃんまで……」

クラス……いや学校一かな？先月の図書室ランキングで四十二冊の本が貸し出しされて名前が貼ってあったし（さらに市の図書館からも借りている）……の読書家の鳩子ちゃんがこっちに来た。

鳩子ちゃんと僕は……再タジャレじゃない従兄妹で幼稚園の頃からよく一緒に遊んでいて愛称で呼び合う仲だ、中学生になってからは少し疎遠気味になってたんだけど、いきなり会話にはいつて来るなんて、どういう風の吹き回しなのかな？そして気がついたら四面楚歌だった。どうして僕の周りには一般的な感性を持つ人がいないんだろう？

「ええと、楠木君……だって、君ってなんか偏見が強くてガンコだよ
ね」

日向さんは今朝の未来君みたいにフーヤレヤレと溜息をつく(まさに今朝の再現)、どうやら日向未来という人種は僕と相性が悪いらしい。

めっちゃムカつく。

「もういいや、だったらもう読まないさ」

言い返すのもアホらしいので相手にしないことにした。どうせまた読まずにはいられなくなるんだろうけど、今くらいは拗ねたっていいだろう。

「みゃー君って昔からこうだから、私のすすめる本もあんまり読んでくれないし」

呆れたように鳩子ちゃんが呟く、それは聞き捨てなら無いな。

「ちよつと待てや、よんで数ページ目からのセリフが『お兄様、お兄様、お兄様』ってひたすら連呼する本(夢野久著作 ドグラ・マグラ)なんて読めるか!実際に妹がいるんだぞ!嫌な想像しちゃうじゃねえか!」 ドグラマグラファンの方、申し訳ございません。自分のキャラを忘れて思わず再度大声を出してしまった。

「楠木!うつさい!」

後ろから赤崎さんが投げたシャープペンシルが飛んできて背中に刺さる。

痛くないけど、クラスメイトの視線が痛い、敵がどんどん増える僕、誰か味方してください。

バァァァァァァァァァァ

そんな事を考えたのがいけなかったのかな、いきなりクラスの扉が勢いよく開きそいつは登場した。

……ああ、面倒臭いのが来ちゃったよ。

「呼んだかい？愛しのマイハニー」

隣のクラスの2-Aの美男子、窓辺渡君だ。まどへわたる彼はスポーツ万能で成績優秀、そして眉目秀麗、なのに……

「キミの心の声を聞いて駆けつけてきたんだヨ！都、これもボク達の愛の成せる業サ！」

物凄く残念なガチホモ野郎なのだった。

「……………キモ……………」

日向さんが呟いた。よかった、渡君は黙ってさえいれば万能美少年なので勿論最初は女子から凄くモテるんだけど、彼の本性を知ると……大概の人がシヨックを受けちゃうんだよね。だから初対面の内に彼の本性を見れた日向さんはラッキーな方だと思っ。

ま、関わっただけで十分アンラッキーなだけだね。

「呼んでないよ渡君、だからさっさと自分のクラスに帰ってね」

下手に出ると渡君は付け上がってくるので、できるだけ冷たく言うんだけど、それをどう解釈したのかな？めっちゃ嬉しそうに顔をしながら渡君は頷いた。

「そうかい、ボクが来た時点でキミの問題は解決したんだネ！では退散するヨ！」

確かに鳩子ちゃんはその席で我関せずといったように読書していて、赤碕さんはうるさ過ぎて教室から出て行き、日向未来コンビは呆れていてポカーンとしている。周りのクラスメイトにいたっては白々しく世間話を始めた、どうやら皆も渡君と関わりたくないようだ。ま、おかげで助かったけど……

認めたくない！

渡君は出てきた時と同じように騒々しく教室から出て行き、その後面倒臭くなったのか未来君達は僕に何も言っ来なくて、日向さんと仲良く話していた。

「え？」

一部始終を見ていた鳩子ちゃんがとんでもない事を言い出した。それに対し、僕は大げさなくらい全身で否定のアピールをする。そんな勘違い、あつてはいけない。

「何言ってるの鳩子ちゃん？あんなの付き合っているなんて、未来君と付き合う方がマシだよ」

ざわざわざわ！？（クラス中が僕を見る音）

ひそひそひそ！？（クラス中が囁きあう音）

????????（全身アピール男の反応）

えっと、僕、何か変な事を言ったかな？ちゃんと渡君とは何にも無いつて言ったよね？なのに目の前の鳩子ちゃんは目を見開いて顔を真っ赤にしてる。なんで？

「みゃー君って……その……ホモ………なの？」
その瞬間、思考が止まった。

「ほ？もけ？………%e3%82%ae%e3%83%a3%e3%82%b0%e3%83%9e%e3%83%b3%e3%82%ac%e6%97%a5%e5%92%8c%e80%80%e8%81%9………??？」
文字化けではありません

「あの、みゃー君？大丈夫？」

あ、やべ、なんか電子世界の向こう側にDIVEしてた。いけない、いけない………っじゃなくて！何で僕がホモなんだよっ！
「鳩子ちゃん、君はとてつもない勘違いをしている、僕は決してホモなんかじゃない！ってどうか同性愛なんて認めない。僕はちゃんと女性が好きな普通の男だよ」

鳩子ちゃんの肩を掴み、力説する僕。周りからひそひそと話す声が聞こえるけど、気にしちゃうられない。これだけは訂正しておかないと。

「でもさつき、渡君と付き合うより未来君と付き合うほうがいいって」

「……なんて間違った解釈の仕方なんだろう。」

「その付き合うは未来君の書くライトノベルを書く事に付き合っていて意味だったんだけど……ええと、つまりは、面倒事に付き合っている意味で言ったの」

はあ、今未来君が教室に居なくてよかった。HR後に未来君は続きを書くため図書室に向かっていた。これを聞かれたらもう自作のライトノベルを読ませてくれなくなるだろう。

「……そっかあごめんね、変な事言って……」

そうして安心したように鳩子ちゃんは一息ついた。危ない危ない、根も葉もない噂が流れる所だった。

チツ（クラスメイトが一齐に舌打ちした音）

「お前達は一体、僕に何を望んでいるんだあ！」

いじめだ！クラス単位でのいじめだあ！助けて佐倉先生！

「期待させやがってええ、この女顔があ！」

誰だ！人の気にしてる事をオブラートにも包まずにダイレクトに僕の心を的確にえぐってくる奴は！ん？あれ、鈴樹君？なんか、泣いてる？

「信じていたのに、信じていたのに、楠木は男の娘だと信じていたのに！！！」

いつもは大人しくてクールなクラスメイトの豹変振りに全く着いていけない僕がそこにいた。……じゃなくて。

なるほど、こいつは渡君と同類か、なら簡単だ。

ゴスッ（僕が鈴樹君の鳩尾を殴る音）

ドサッ（鈴樹君が倒れる音）

ペッ（それに僕が唾を吐く音）

「さて帰ろう」

パンパンと手を払いながら僕は啞然として誰も動かない教室を去ろうとする。

「よう楠木、元気いいなあ」

いつも通りの笑顔の佐倉先生が現れた。何故か右手にロープを持って。そして視界の隅には何故か幸せそうな鈴樹君の顔が見えた。幻覚であると信じたい。

もう…嫌だ……

その後、お縄を頂戴した僕は職員室に強制連行され、くどくどと三十分間説教を受け、さらに反省文五枚を言い渡された。普段温厚な佐倉先生があんなに怒るなんて、僕、何か悪い事したかなあ？

思いつきりしてます。とツツコミを入れてくれる人が誰もいない教室で僕は溜息をついた。

「あれ？楠木、何でいるの？」

「ああん？誰だ、放課後にわざわざ教室に来るアホは…って赤碕さん？」

「どうしたの赤崎さん」

あからさまに顔をしかめている赤崎さんは面倒臭そうに僕を見る。彼女が不機嫌な原因は間違はなく昼休みの事だろうけど、そんなに僕は悪い事をしたとは思えない。とりあえず適当に流して刺激しないようにしよう。

「先に質問してるのはこっち、先に答えなさい」

ちっ、言いたくないのに。

「未来君の書いたライトノベルの添削してる」

言いたくないから適当に嘘をついた。

皆もよくあるよね言いたくない事を隠すために付く嘘って。

「あんた達って仲いいのかわいいのかわかんないわね」

上手く誤魔化せたようだった。

「別に仲がいいわけじゃないよ、興味本位で話しかけたら、いつの間にか付き合わされちゃってるだけさ」

実際後悔はしている。

「それでもホントに嫌なら付き合わないでしょ、やっぱり楠木ってあれなの……ええとホモ？」

まだそのネタを引く張るのか、ん？いや待てよ。

「何で、赤崎さんがその事知ってるの？」

……ん、あれ？

自分で言った言葉に違和感を感じた。そして赤崎さんが目を見開いて……マジ……なの？……という眩きが漏れて、自分の失言に気付いた。今の答え方ではまるで僕がホモであることを言い当てられたみたいじゃないか。

「いや、今の言葉は、その、さっきそつという話題があっただけで、別に僕は男が好きなのではなくて……」

「……………」

必死で弁解してみるも、赤崎さんは黙って俯いているだけだった。

ええい、なんで一日に二回もホモ疑惑の弁解しなくちゃいけないんだ！

「赤崎さんがそんな事言い出すとは思えなくて、つい……その、言葉のあやで……」

「……………」

必死で弁解を続けてみるも、やはり赤崎さんは僕から目を背けて
いる。

「その、あれだ、いい間違えってどうか……」
(以下同文)

「……………」

「あ、あのね、ぼ、ぼくはね……」

あ、とうとう舌が回らなくなってきた……

口もからからになって、嫌な汗を感じる。

ああもうヤダ……

「もういいよ」

「へ？」

俯いていた赤崎さんが顔を上げながらそう言った。

あれ、笑ってる？

「あんた達の会話、廊下にまで響いてたから知ってるよ、今は昼
休みの仕返し」

な、なんだそりやああ

脱力した僕を尻目にクスクス笑いながら赤崎さんはそういえばと
呟く。

「さつき西燕…じゃなかった日向が日向を探してたけど居場所、分
かる？」

うん？今聞き逃せない単語が出たぞ。

「赤崎さん、その西燕って何」

「だから、先に質問してるのはこっち、あんたが先に答えなさい」
「こ、この子めんどくせえ！」

「未来君はこの時間ならまだ図書室にいるよ、っていうか赤碕さんが知ってどうするの？」

その質問はポケットから取り出した携帯電話を見て、なるほどと納得した。

「西燕つてのはあの子が今朝会った時に私にそう名乗ったの、すぐに訂正したけどね」

なるほどね、親の事情で転校してきた……か。

僕の妹も中々複雑な事情があるから人事とは思えないな。

「本人には言わないでね？理由は分かると思うけど」

赤碕さんは釘を刺すように僕を睨みつけて教室から出て行った。

そういえば、彼女は何をしに教室に来たのかな？結局聞けず終いだっだし、まあ何かの伏線じゃないといいけど。

と、それはともかく反省文も書き終わっだし、さっさと提出してかーえろつと。

「その前に、やることがあるでしょ？」

今度こそ、と荷物をまとめて教室を出た僕に追撃の一言が浴びせられた。

…ええと、なんで学校（こ）に居るのかな？ちゃんと屋敷で大人しくしてるとあれだけ言ったのに。

「やることって何だよ？…ユウキ」

振り向くとそこには金髪碧眼で白いワンピースを着た、まるでビスクドール（西洋人形）のような少女がロリポップキャンディを持って立っていた。

味なんて分からないだろうに。

「あの人の書いた筋書き、まだ全部読んでないんでしょ？」

「つち、やっぱりお見通しか。」

「いいんだよ今日は、夢オチだったし」

「投げやりで答えるとユウキは虫けらを見るような目（相手を馬鹿にしきつた目）で僕を見た。」

「それってつまり、現実の事は何も分かっていないって事じゃないの？」

「……ああ、そっか。」

「でも今回は大した事無いと思うよ、主人公が馬鹿だし」

「あの人の小説って話の前半と後半がかみ合っていないってこの前言ってたでしょ、そんな夢の部分だけでその物語の何が分かるの？」

「まあたしかにその通りなんだけど、今はちよつと未来君に話しかけるのは気まずいというか……ええい、分かったよ行ってくるよ、行けばいいんだろ！」

「あなたがサポートしろって言ったんでしょ？」

「はいはいその通りですよ、確かに言いました。」

もう、僕以外に理不尽な不幸に悩まされる人なんて見たくないし。

「よし、それでこそあたしの人形ね」

「お互い様だろ」

このパペッター（人形遣い）女

そつと本音を心で呟き僕は図書室へと歩き出した。

「なんて奇跡、なんて幸福、都がボクを待っていてくれ…バフウウウウウツ！！！！！」

何も見えない、何も聞こえない………うん、OK図書室に行こう。
「時々思うんだけど、あなたってすぐ暴力行為に走るわね」

まだ居たのか、ユウキ。

「なんの事だい？」

足元に転がる体中が凸凹した物体を足で小突きながら笑顔で聞く。
ユウキは、ドン引きしていた。いやいや僕がユウキにされた事に

比べれば可愛いもんだと思うけど？

「ええと……何かごめん」

いきなり謝られた、頭でも打ったのかな？心配だ。
なんてふざけるのもここまでにして。

「別にユウキが気にする事なんてない、元々僕たちは同じ被害者だからね」

あの男のね。

「じゃ、もう行くから、寄り道せずに真っ直ぐ帰れよ」

「うん」

ユウキが視界からいなくなったことを確認すると再び図書室へと歩き出した。

はあ、気が進まないな。

「あれ？みゃー君？」

図書室の前に着くと中から鳩子ちゃんが現れた。

ノウシスターノウブラザー 4 (後書き)

次の投稿は来年になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8763z/>

クレイジードール

2011年12月29日17時47分発行